



梅 雨入りが報じられた朝、その名の通り鉛色の空が広がった。やむを得ず、久しぶりに自動車通勤することにした。ところがあれこれかまえてしまったようだ。仕方がないので、妻の車で行くことにしたが、これまたエンジンがかからない。それぞれロードサービスに連絡し、学校には遅刻の連絡をし、業者が来てくれるまでの時間コーヒーを入れてゆつたりと反省に浸った。

ここ三カ月あまり、好天が続いたこともあって、ほとんど車に乗らなかつた。自転車通勤が思ったより快適であったこと、外出規制によつてさらに車を使う機会が減ったことが、すつかりぼくを車から遠ざけた。妻は妻で、便利さに目覚めたと言ひ、どこにでも自転車で行けるようになった。

加えて、自転車通勤時のスピードや所要時間、消費カロリーなどのデータがたまつていくのがおもしろくもなつてきた。人からすれば何の価値もないデータでしかないが、自分の体重や血圧値を知つておきたいのと同じ好奇心がつい向かつてしまう。

もう一つ。手帳のカレンダーに自転車を使った日は印をつけるようにしているのだが、これが自分にはまるでポイントカードと同じ効能を発揮するのだ。ガソ

リン代と二酸化炭素の排出を抑制したことに与えられるご褒美である。あれもこれもですつかり車を使わないことに執着してしまつた結果がこれだ。

どこかで予期していた。常日頃関心を向けられている物と、放つておかれている物と、その身にまとう空気が異なる。ただの物でしかない車であるのに、ぼくが目を向けると視線をそらすように見えるし、ため息さえ聞こえてくるような気がしていたのだ。引け目が視覚に投影しただけかもしれないが、一軒の家を見るどことなく住む人の心が感じられるのと同じで、どんな物であつてもまともな空気の質感は使い手との関係を映すような気がする。

結局、二台ともバッテリーを交換しなければならなくなつた。コツコツと節約していたつもりが、カネも資源も散財することになつてしまつた。心が及ぶ以上の物を持つているがためにこんなことになる。

コーヒー片手に読んでいた『論語』の一節に目がとまつた。「その老ゆるに及びてや、血氣既に衰う。之を戒むること得るに在り」(老年になると心も活動も能動的にならぬため、座して利益を得たり、貯め込みたがる、気をつけよ。)

痛い。

專業ババ奮闘記(その2) 10

木幡智恵美

小旅行(5)

叔母の家ではルークのけたたましい声に迎えられた。いつ来ても、叔母の家には犬がいる。三十年前に行つた際は、ノンという名のシェットランドシープドッグだったが、このところはコーギーだ。ルークの前はボギーという大人しい犬だった。同じコーギーで、顔もボギーによく似ているのに、ルークはとにかくよく吠える。寛大と実歩は玄関先ですくみ上つてしまつた。二年ちよい前に来た時のルークはまだ子犬で仕方がないと思つていた。もういい大人なのに、相変わらず吠えまくる。寛大、実歩が怖がるので、ルークは隔離された。

ルークの声が聞こえなくなると、寛大はもうこの家の住人かのように、叔父や叔母相手におしゃべりを始める。はじめは固い表情だった実歩も、寛大につられてか、少しずつ声を出すようになり、「ゾウがパオウつていった」と目を丸くして叔母に話していた。

動物園を歩き回り体は疲れ切つているのになかなか眠りにつけない。焼酎を一杯あおつてようやく朝まで眠れた。洗濯物を干した後、叔父とルークの散歩にお供する。ボギーは叔父の近くを離れずに歩いていたので、ルークは度々走り出す。しばらくすると叔父の近くまでやつてきて、また疾走というのを繰り返して家に着いた。泥まみれのルークの腹を洗つてからという叔父を残し、家の中に入る。小さい体で公園中を歩いた実歩が、やつと起きたところだった。朝食を済ませ、寛大や実歩と折り紙をして遊んでから、お弁当作り。この日、従弟夫婦が千葉からやつてきて、近くの公園で一緒に昼食を摂ることになっている。

叔父叔母、従弟夫婦、私たち親子三代、そしてルークと大所帯で近くの公園へ。お弁当を食べて従弟がルークを歩かせに立つと、寛大が付いていく。戻つて来た寛大はルークの背中をさすつていた。「ルークとお友だちになつた」寛大は満面の笑顔。

その夜、お風呂に入る際、いきなりルークに吠えられた寛大。またもやすくんでしまつた。



30代フリーター やあ、ジイさん。新型コロナウィルスへの対応のもたつきと、検察庁法改正をめぐるつまずきは、安倍政権の弱体化をあらわにした。

年金生活者 それだけでなく、権力の分散が進んだ国家の揺らぎも垣間見えた。

資本主義の高度化とテクノロジーの発達には富の稀少性の縮減を加速し、国家から個人、企業、国家間システムへの権力の分散を促した。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業への、そして資本のグローバル化が国家間システムへの権力の分散を駆動した。

コロナ対策では、政府の動きの鈍さとは対照的に、大阪府や東京都の知事の影響力が増した。地方自治体は国家と社会の中間に位置する存在だ。社会を構成する個人と企業に国家の権力が分散する過程で、その権力の一部が地方自治体に向かったと考えることができる。

間企業であり、権力の分散先のひとつに数えられる。「文春砲」が威力を増している要因の一部がそこにある。

30代 マスメディアの本流にいたジイさんの今の気分はどうだい。

年金 私は検事長と賭けマージャンをして癒着するような、言い換えればエライ人に食い込むような優秀な新聞記者ではなかった。それでも、ときには仕事がうまく行ったと感ずることがあり、振り返っていい気分になることもあった。

だが、今はそれを思い出すと恥ずかしく感じるが多くなった。マスメディアの本流から権力が分散した結果、その権力に助けられていい気になつていたおのれに気づかされるからかもしれない。

30代 「医療は、これまで誰も持ち得なかつた『国民の権きえも制限できる巨大な力』を持つてしまった」（森田洋之「人は家畜になつても生き残る道を選ぶのか?」、4月14日南日本へルスリサーチラボ）。医師自身にそう

コロナ危機が生み出した「自粛警察」も個人への権力の分散を背景にしている。公式には何の権限もない彼らが人の行動に影響を与えている。それが戦時中の国防婦人会にたとえられるのは、コロナ対策が戦争にたとえられるのと同じだ。戦争は国家への権力の集中に見えるが、国民ひとりひとり戦争という国権の発動の担い手になるという意味では権力の分散でもある。

今国会での検察庁法改正を政権に断念させたツイッターデモの力も、国家から個人への権力の分散がもたらしたと考えることができる。それが検察を水戸黄門のような正義の味方と考える日本人の前近代的なメンタリティーと手を携えて政権を追い詰めた。

30代 東京高検検事長の賭けマージャンまで暴露された。

年金 それを報じた週刊文春のスクープは、これまでマスメディアの本流とされてきた新聞とテレビを、傍流の週刊誌が凌駕したことを示す出来事となつた。背景にはやはり国家からの権

言わしめるほど新型コロナウィルスは医療の持つ権力の大きさを明るみに出した。ジイさん、前にそんなこと言つてたな。

年金 医療の権力が大きくなつたのは、産業のソフト化に駆動されて国家から企業へ権力が分散した結果だ。巨大化した製薬・医療機器会社は世界の医療の方向と各国の医療行政を左右する力を持つに至っている。

その権力から「医療崩壊するかもし

力の分散があると考えないわけにはいかない。

新聞とテレビは国家の間近に取材の拠点を置いている。それが役所の情報を独占するギルドとしての記者クラブだ。このことは両メディアが国家の権力の一部を分け持っていることを意味する。つまりマスメディアの本流は純然たる民間企業とは言えない。

これでは、マスメディアの役割のひとつとされる権力の監視はできないように見えるが、そうとばかりは言えない。実際に役所の不正を暴くことはいくらでもあるからだ。マスメディアが第4の権力と呼ばれることがあるように、権力の分立による抑制と均衡がそこに働いているとみなすことができる。

産業のソフト化に駆動された国家から企業への権力の分散は、国家の権力を分け持つてきた新聞とテレビにも当然ながら及んでいる。記者クラブの外にある、言い換えれば国家の権力を分け持つていない週刊文春は純然たる民

れない」と脅されて自粛に励んだ諸個人は、医療に対して弱い立場に立っているように見える。だが、「医療崩壊」を最も恐れたのは、おのれの崩壊に脅えた医療自身であり、その危機を現出させたのは、感染の不安に駆られて検査や診察を求めていちどきに医療機関に向かつた諸個人だ。

その諸個人は同じ不安から、それまでかかつていた医療機関での受診を控えるようになったとも報じられている。医療コンサルティング会社メディアが全国約100の医療機関に尋ねたところ、外来で2割強、入院で1〜2割の患者の減少が判明したそうだ（5月31日朝日新聞朝刊）。

このことから言えるのは、個人は医療に対して劣位に立つばかりでなく、優位に立つことも多いということだ。消費の半分が選択的消費で占められているように、医療機関を受診するかどうかは個人の選択にかかつている部分が多いからだ。それもコロナがあらわにしたことのひとつと言つていい。

ニュース日記 742
中村 礼治

コロナと権力